中日對譯・文法詳注

日本名著選讀

左靈秀 譯注

名山出版社 出版

中日對譯・文法詳注

日本名著選讀

左秀靈　譯注

作　者

森　鷗外
有島五郎
小川未明
吉田弦二郎
國木田獨
長谷川如是

名山出版社　出版

秀水名山創事業・靈蘭石室治經書

版權所有・請勿翻印

日本名著選讀

譯注者：左秀靈
發行人：左秀靈
出版者：名山出版社
台北市大直通北街142巷25號
電話：(02)5627541
臺北地區總經銷：恒生圖書公司
臺北市重慶南路一段55號
電話：3711341・3711343
郵政劃撥帳戶515111號
香港地區總發行：東亞圖書公司
香港干諾道西一二一號二樓
新加坡地區總發行：友聯書局有限公司
新加坡小坡大馬路三〇三號
馬來西亞總發行：馬來亞圖書公司
吉隆坡武吉免登路二二號

●定價新台幣200元●

登記證：局版台業字第〇〇四一號
中華民國七十二年一月一日初版

自　序

在本省學習日文風氣之盛、人數之多，僅次於英文，但是國人編纂的日文辭典、文法書、日語讀本等，無論在質與量，都遠不及英文，因此本省講授及進修日文之人士缺乏上乘的工具書，要想日文有突破性的提升，無異痴人說夢！編者有鑒及此，不揣譾陋，曾先後編了「日本諺語成語辭典」、「最新日語口語文法」等，並將原有之「日華大辭典」徹底增訂問世，以期彌補日文工具書之質及量於萬一。

本書就是在上述心情及心願之下，譯注問世的。

本書由日本近代六位文豪分別所寫的短篇小說集合而成，無論詞藻、內容，在日本文壇上都是不可多得的佳構。筆者不揣譾陋，特予對譯及注釋，深信對中、上級日文程度欲進修及欣賞日本文學者頗有助益。

特將六位作者的傳略，根據「新世紀百科辭典」摘譯如下，聊供讀者參考。

森　鷗　外（1862－1922）

本名林太郎，小說家、劇作家、評論家、翻譯家。畢業於東京大學醫學部，留學德國。氏精力充

沛，除了潛心文學著作、翻譯之外，歷任陸軍軍醫總監、帝室博物館長、帝國美術院長、臨時國語調查會長等職。

有島五郎（1878－1923）

小說家，氏以自然主義的筆法寫了一本名著「或女」。著有「凱因之末裔」等。

小川未明（1882－1961）

本名健作，小說家、童話作家。原先是新浪漫主義小說家，以後，全力寫作富於幻想性強烈的抒情童話作品，是近代童話創作的先驅。童話集有：「紅船」「紅蠟燭和人魚」等。

吉田弦二郎（1886－1956

本名源次郎，小說家、隨筆家、劇作家。氏之小說傾向傷感、抒情，故爲青年男女所愛讀。著有：「島秋」「吾詩吾旅」等。

國木田獨步（1871－1908）

本名哲夫，詩人、小說家。爲日本唯理之短篇作品之嚆矢。氏又爲浪漫主義文學至自然主義文學之橋梁。著有：「武藏野」「獨步集」「命運」等。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

長谷川如是閑（1875－1969）

本名萬次郎，評論家。歷任「日本」「大阪朝日新聞」記者。1919年與大山郁夫等創刊「我等」雜誌。1948年榮獲文化勳章。著有「現代國家批判」「有心自敍傳」等。

目　錄

高瀨船 …… 2
人生的苦惱 …… 42
越後的冬天 …… 106
淒涼的冬天 …… 144
帽子 …… 176
兩個雜技演員 …… 198

高瀬舟

森鷗外

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇乞[1]をすることを許された。それから罪人は高瀬舟にのせられて、大阪へ回されることであった[2]。それを護送するのは、京都町奉行[3]の配下にいる同心[4]で、この同心は罪人の親類のうちで、主立った一人を大阪まで同船させることを許す慣例であった[5]。これは上へ通った事ではないが、いわゆる大目に見るのであった、黙許であった。

当時遠島を申し渡された罪人は、もちろん重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して盗をするために、人を殺し火を放ったというような、獰悪な人物が多数を占めていたわけではな

1.〔暇乞い〕 原義爲"告別"、"辭行"。

2.〔大阪へ回されることであった〕＝大阪へ回されるのであった/被押送到大阪去。

高瀨船

森鷗外

高瀨船是一條在京都高瀨川上往返行駛的小船。德川年間，京都的犯人只要被宣判到荒島去服流刑，他的家屬就被叫到牢房裏，獲准在那兒跟犯人相見一面。然後犯人就乘上高瀨船被押送至大阪。押送犯人的是京都府尹下屬的公差。公差允許犯人的一個家屬同船陪到大阪，這是一條慣例，雖然沒得到上面的許可，但却是所謂的寬容，也是默許。

當時，被判去荒島服流刑的犯人，不用說，都是些被認爲犯了嚴重罪行的人。可是，諸如那些爲了盜竊而殺人放火的凶惡人物却爲數不多，乘坐高瀨船的犯人多半由於所謂行爲失檢，而犯下了意想不到的罪行。舉個常見的例子來說，有

3.〔町奉行〕 江户時代，幕府(當時的中央政府)在日本各大城市設置的官職，掌管行政、司法、警察等事務。

4.〔同心〕在"町奉行"下面，掌管雜務的下級官吏。

5.〔……を許す慣例であった〕＝……を許すのが慣例であった＝慣例としては……を許した/通常(慣例上)允許……。

い。高瀬舟に乗る罪人の過半は、いわゆる心得違のために、想わぬ科を犯した[1]人であった。ありふれた例をあげてみれば、当時相対死といった情死を謀って、相手の女を殺して、自分だけ活き残った[2]男というような類である。

そういう罪人をのせて、入相の鐘の鳴るころに漕ぎ出された高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家々を両岸に見つつ、東へ走って、加茂川を横ぎって下るのであった。この舟の中で、罪人とその親類の者とは夜どおし身の上を語り合う。いつもいつも[3]悔やんでも還らぬ[4]繰言[5]である。護送の役をする同心は、そばでそれを聞いて、罪人を出した親戚眷族の悲惨な境遇を細かに知ることができた。しょせん町奉行の白洲で、表向の口供を聞いたり、役所の机の上で、口書を読んだりする役人の夢にもうかがうことのできぬ[6]境遇である。

同心を勤める人にも、いろいろの性質があるから、この時ただうるさいと思って、耳をおおいたく思う冷淡な同心があるかと思えば、また[7]しみじみと人の哀を身に引き受けて、役柄[8]ゆえ気色

1.〔思わぬ科を犯した〕＝思いがけなく罪を犯した/無意中犯了罪。

2.〔……情死を謀って、相手の女を殺して、自分だけ活き残った〕＝……情死しようとしたが、その結果、相手の女を殺し

一個男人打算搞一種當時被稱“雙雙死”的殉情，結果殺死了女方而自己却獨自活了下來，大凡是這樣一些人物。

黃昏，高瀨船載着這種罪犯，隨着悠揚的鐘聲解纜離岸，駛過兩岸薄暮籠罩的京都街市，向東穿過加茂川，直下而去。在船上，犯人和他的家屬通宵達旦地互相傾訴着各自的境況，其實，不外是一些後悔莫及的牢騷話。擔任押送的公差總是在一旁豎耳傾聽，所以能夠詳細地了解犯人的家庭及其親屬的悲慘遭遇。而這些遭遇是那些在公堂裏聽聽敷衍了事的口供，或坐在衙門裏看看供詞的官老爺們無論如何也想不到的。

幹公差這一行的人，性格也不盡相同。有的冷漠無情，在這種時刻，只覺得厭煩，想掩耳拒聽；有的則深深感受了別人的悲哀，雖然由於職務關係不能表露出來，但在默默無言中，內心却

ただけで、自分は死ななかった/……打算殉情，結果只殺了女方，自己却没有死……。

3.〔いつもいつも〕=いつでもきまって/總是。

4.〔悔やんでも還らぬ〕=後悔しても何ともならない/後悔莫及。

5.〔繰言〕牢騷。

6.〔夢にもうかがうことのできぬ〕=夢にも考えられない/做夢也没有想到。意即：全然思いもよらない/根本想不到的。

7.〔……冷淡な同心があるかと思えば、また……〕=……冷淡な同心があったり、また……(もある)/既有冷酷無情的公差，也有……。

8.〔役柄ゆえ〕=官職上=官職のため/由于官職的關係。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

には見せぬながら[1]、無言のうちにひそかに胸を痛める同心もあった。場合によって[2]非常に悲惨な境遇に陥った罪人とその親類とを、特に心弱い、涙もろい同心が宰領して行くことになると、その同心は不覚の涙を禁じ得ぬのであった[3]。

そこで高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間で不快な職務としてきらわれていた。

*　　*　　*

いつのころであったか。たぶん江戸で白河楽翁侯が政柄を執っていた寛政のころででもあっただろう。智恩院の桜が入相の鐘に散る春の夕に、これまで類のない、珍しい罪人が高瀬舟にのせられた。

それは名を喜助といって、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。もとより牢屋敷に呼び出されるような親類はないので、舟にもただ一人で乗った。

護送を命ぜられて、いっしょに舟に乗り込んだ同心羽田荘兵衛は、ただ喜助が弟殺しの罪人だということだけを聞いていた。さて牢屋敷から桟橋まで連れて来る間、この痩肉の、色の青白い喜助の様子を見るに[4]、いかにも神妙に、いかにもおと

1.〔気色には見せぬながら〕＝表面には出さないが/不形之于

暗暗悲傷難過。尤其是心軟易動感情的公差，當被派去押送一個陷入慘境的犯人及其家屬時，不禁會潸然泪下。

所以衙門裏的公差都把高瀨船上的押送工當作一項苦差使而不願去幹。

記不清是幾時了，大概是白河樂翁 *在江戶執政的寬政年間。一個春天的傍晚，知恩院的櫻花在深沉的晚鐘聲中紛紛飄落。一個古今少有的特殊犯人被帶上了高瀨船。

這個男人名叫喜助，約莫三十歲上下，沒有固定的住所。本來就沒有什麽親屬好被叫到牢房裏去，所以在船上也只有他孑然一身。

奉命去押送一塊乘船的公差羽田莊兵衞，只聽說喜助是個殺死弟弟的犯人。把喜助從牢房帶到碼頭時，莊兵衞一路上端詳了這個瘦骨嶙峋，面色蒼白的囚犯的神情，總覺得他非常老實而溫順，把自己作爲官差表示恭敬，任何事從不違命

色。"ながら"是接續助詞，在此意爲：雖然。△耳はきこえぬながら、高らかに歌っている/雖然耳朵聽不見；却還是高聲唱着。

2.〔場合によって〕＝時には/有時。

3.〔不覚の涙を禁じ得ぬのであった〕＝思わず涙が出るのをどうすることもできなかった/不覺流下眼淚。不覚＝思わず知らずすること/不知不覺地(做某件事)。禁じ得ぬ＝とめられない/禁不住；止不住。

4.〔見るに〕＝見ると/端詳一番。"に"是接續助詞，在此表示假定，等于"ならば"。△つらつら考えるに、成功の鍵はここにある/仔細一琢磨，成功的關鍵就在這裡。

なしく、自分をば[1] 公儀の役人として敬って、何事につけても逆らわぬようにしている。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるような、温順を装って権勢に媚びる態度ではない。

荘兵衛は不思議に思った。そして舟に乗ってからも、単に役目の表で見はっているばかりでなく絶えず喜助の挙動に、細かい注意をしていた。

その日は暮方から風がやんで、空一面をおおった薄い雲が、月の輪郭をかすませ、ようよう近寄ってくる[2] 夏のあたたかさが、両岸の土からも、川床の土からも、靄になって立ちのぼるかと思われる夜であった[3]。下京の町を離れて、加茂川を横ぎったころからは、あたりがひっそりとして、ただ舳に割かれる水のささやきを聞くのみである[4]。

夜舟で寝ることは、罪人にも許されているのに、喜助は横になろうともせず、雲の濃淡にしたがって、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙っている。その額は晴れやかで目にはかすかなかがやきがある。

荘兵衛はまともには見ていぬが、始終喜助の

1.〔自分をば〕=自分を。

2.〔ようよう近寄ってくる〕=だんだん近づいてくる /逐漸逼

。而且這並不是在犯人中間司空見慣的那種僞裝溫順，取寵權貴的態度。

莊兵衞感到不可思議，上了船也一直留心觀察喜助的一擧一動，不過，這不僅僅是一種出於履行職責這個表面理由而進行的監督。

這天夜晚，風從黃昏時就已停歇，透過布滿天空的薄雲，月兒的輪廓朦朧可見。仲夏日益臨近，一股股暖氣仿佛正變成濛濛的霞烟，從兩岸的大地、河床的泥土上裊裊升騰。小船離開了下京區的街市，橫穿加茂川之後，四周就靜悄悄的了，只有船頭划破水面時發出的竊竊私語聲。

入夜，犯人也被允許在船上睡覺，可是喜助壓根兒不想躺下，只是默默地仰望在厚薄不同的雲層裏穿行而若明若暗的月兒。他的前額亮晶晶的，眼睛裏閃爍着光芒。

莊兵衞雖然沒正視喜助，但是他的視綫始終沒離開過喜助的面龐，而且心裏不斷地嘟噥着：

近。

3.〔夏のあたたかさが、両岸の土からも、川床の土からも、靄になって立ちのぼるかと思われる夜であった〕＝夏のあたたかさが、靄になって、両岸の土からも、川床の土からも立ちのぼるのではないかと思われるような夜であった。

4.〔水のささやきを聞くのみである〕＝水のかすかな音がきこえるだけであった/只聽見輕微的水聲。

顔から目を離さずにいた。そして不思議だ、不思議だと、心の内でくり返している。それは喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しそうで、もし役人に対する気兼がなかったら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌い出すとかしそうに思われた[1]からである。

荘兵衛は心の内に思った。これまでこの高瀬舟の宰領をしたことは幾たびだかしれない。しかしのせて行く罪人は、いつもほとんど同じように、目も当てられぬ気の毒な様子をしていた。それにこの男はどらしたのだろう[2]。遊山船にでも乗ったような顔をしている。罪は弟を殺したのだそうだが、よしやその弟が悪いやつで、それをどんな行きがかりになって殺したにせよ、人の情としていい心持ちはせぬはずである。この色の青い痩男が、その人の情というものが全く欠けているほどの、世にもまれな悪人であろうか。どうもそうは思われない。ひょっと気でも狂っているのではあるまいか。いやいや。それにしては何一つつじつまの合わぬ言葉や挙動がない。この男はどうしたのだろう。荘兵衛がためには[3]喜助の態度が考えるほどわからなくなるのである。

*　　*　　*

“奇怪！奇怪！”這是因爲看來看去，喜助的臉總是樂滋滋的，要不是對官兒有所顧忌，他幾乎就要吹起口哨，或者哼起歌兒來。

莊兵衛心裏在思索着。迄今自己也不知道擔任過多少次高瀨船的押送工作了，不過，經自己押送的犯人幾乎是一個模樣，都顯出一副目不忍睹的可憐相。然而這個男子是怎麽回事呢？他這副神情就仿佛乘坐在遊覽船上一樣。據說他犯了殺弟之罪。可是，就算弟弟是個壞蛋，而且也不論在什麽情況下殺死弟弟的，從人之常情來說，他心裏應該很不好受。難道這個臉色蒼白的瘦男人是個毫無情義、世上罕見的惡棍嗎？可是，怎麽說也不像這號人，會不會是一時的神經錯亂呢？不！不！他說話從不顚三倒四，擧止也一直正常。這個男子是怎麽回事呢？莊兵衛越想越覺得喜助的態度難以理解。

1.〔口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌い出すとかしそうに思われた〕＝いまにも口笛を吹きはじめたり、鼻歌を歌い出したりするように見えた/仿佛就要吹起口哨或哼起歌曲來。“しそうに”由“する”的連用形“し”接助動詞“そうだ”的連用形“そうに”構成。△王さんはしそうにも見えない/老王好象不願幹。

2.〔それにこの男はどうしたのだろう〕＝それなのにこの男は一体どういうわけだろうか/然而，這個男子到底怎麽啦？“それに”的“に”，在此与“のに”相同。

3.〔莊兵衛がためには〕＝莊兵衛にとっては＝莊兵衛には/對于庄兵衛(來說)。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com